〈文化学会総会講演〉

自然を生かした藤森流建築

藤森照信

藤森でございます。いろんなことをしておりますけれども、もともとは、建築の歴史の専門家でございまして、もちろんその仕事もずっとしておりますが、たまたま設計もするようになりまして、そちらの方が忙しくて、今はやっております。今日はですね、私の設計というのはおそらく皆さんが一度も見たことのないような、殆ど例のないようなことをやっておりましてね。十数年やっておりますが、誰か少しくらい真似をする人が出てきてくれてもいいと思うのですが、誰も出てこなくてですね。孤立無援のままやっております。

テーマは三つありまして、一つはこういうふうな建物でない建物っていうのはどういうふうに作れるのだろうか、ですね。日本は木を、たいへん木造が豊かに、世界でも屈指の木造の伝統を持っているんですけれども、僕には工業製品に見えてしまうんですね。これは合板といいますけれど、これは鉄やガラスと同じようなものに見えてしまうんです。そうじゃなくて、本当の木が立ってますね。あの木の持っている多様性っていうのがありますね。自然のものですから全部取れた場所で違いますし、その周りの条件で全部変わってくるわけです。そういう自然の材料が持っている多様な乱れとか個別性とかをちゃんと表に出した建築を作りたいと思っています。ですから木とか土とか石とか自然界で取れる材料を、もっとこう自然ぽく使いたいというのがテーマ。

もう一つはですね、これから派生してきたのですが、小さな空間ってありますね。日本だと茶室というのがあります。小さな空間というのは日本だけではなくて、修道院にもありますし、瞑想するための部屋としてルネサンス期に

も作られております。日本の場合、茶室があるんですが、お茶を飲む小さな空間というのは僕には大変興味がある。もちろん茶室という完成されたものがあるのですが、ああいうのは形式が完成されすぎて面白くなくて、もっと別の小さな空間を作ってみたい。もちろん小さな空間でありながら、広い空間に負けないようなちゃんとリアリティー、あるいは心に働きかける小さな空間というものを作ってみたい、というのがあります。ですから自然素材を使う、どう使うかと、小空間を作る、です。

で最後にですね。自然そのものである植物を建築に取り込むという努力をずっとしていまして、たんぽぽハウスとかニラハウスとか変なものいっぱい作っているんです。なかなか上手くいかないんですね。自分で言うのもなんですが、上手くいかない。施主もけっこう困ったりするんですよね。上手くいかないんですけれど、その努力を皆さんにお見せしたいと思います。

まずですね。自然素材をどう使うか、という点からお見せしたいと思います。早速スライドに入ります。僕がこういう建物を作ってみたいというもの、憧れている建物というのをお見せします。これはポルトガルにあるもので、全く建築家でもなんでもない、絵描きさんが作ったポルトガルの山中のスペインとの国境地帯にございます。石が二つあって、もう一個は向こう側にあります、そこにコンクリートで屋根をかけて煙突があります。向うに窓がありまして、窓をのぞくとベッドと竈がありまして、殆ど人が行かないところにありまして、水道も電気もないんです。これを本当に僕は好きでして、結局僕が好きな建築というのは、孫悟空が出てきそうな光景が好きだ、ということが自分でよくわかったんですが。

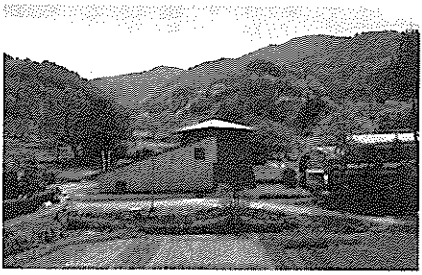
これはですね、日本の国宝です。三仏寺の投入れ堂といいまして、島根県にございます。役の行者といって、修験道の開祖といわれる、伝説上の人物がいますが、その方が下で作ってぽんと投入れたらすっぽりはまった、といわれてまして。それで投入れ堂と呼ばれております。その建物そのものをみますと、平安時代の瀟洒な建物です。藤原道長とか、平等院とかの瀟洒で華奢なデザインです。ここまでは平安時代です。しかしこの足がね。平安時代の瀟洒な形からずっと延びていって、原始的になって、岩につながっているんですね。これがすごく先ほどのポルトガルの石の建物とはまた違う意味で気に入ってまして。これは山岳信仰ですから、行者達がここをずっと、ものすごく危険なところです。上の行をして、最後にここに上がって、仏様を拝みます。ここに入り口がありますけれど、何人も落ちています。最近も落ちています。それで、ここを登ると

きは、普通取材なんかでは素人の場合が多いのですが、山岳の人が、山を登る人がロープを張ってちゃんとやってくれます。僕は一応これくらいの危なさは大丈夫なんで、もちろん黙って登るわけではなく、戸を開けていただいたのですが。本当にこれは日本の自然信仰ですよね。山や川や自然に神様が宿っているという自然信仰を、ここ行くと大抵の人はやっぱり「おおっ」と思いますよ。

こういうものが好きな私が、現代の条件でどんなものを作ってきたか、という話です。これは、私の処女作でございまして、四五歳のときに、地元から、私は長野県の茅野市というところですが、諏訪大社という古い神社があります。御柱という危険で豪壮なお祭をやる、柱を立てるお祭をやるのですが、そこの神社の筆頭神官さんの家がありまして、ものすごく古い家なんです。そこの持っている資料が文化財になりまして、それを入れる建物を地元の行政から頼まれまして、たまたま私がその村で育ったという事と、守矢家の先代のご当主が私の名前を付けてくれたということと、今のご当主も幼馴染ということもありまして頼まれました。板を使おう、ということになったんですが、もちろん部分にですが。その板を、製材した板は嫌だったんです。こういう板。で、昔の技術で作ろうということで、昔の技術っていうのはノコギリがなかった時代に、ノコギリっていうのは鎌倉時代に入ってきてますから、日本では千年くらいですよね、千年もっと前ですかね、鎌倉時代の末から室町くらいですから八〇〇年から九〇〇年しかない訳です。それ以前の日本の木造建築、京都や奈良にあるものは全部割って作っていたんです、板を。てことは文献で解っています。だけど、どういう風に割っていたのかわからないんです。絵が残っています。で、割った板を使おうと思って、薄い板ならまだ割れそうだということで聞きましたら、この職人さんが戦前に屋根用の板を割ったからと言って、やってくださったんですね。で、順序がごっちゃになりますけども、最後の割りに入ってるところです。ピストルみたいな鉈でこう、こじ開けるようにして二センチの厚さのヤツを最後の一センチに割ってるところです。これを割るのはなんてことない。最後が大変です。で、今その前の段階ですね。こうやってノミで割っていきます。で、これはですね、私が昔の文献とかそういうの見てもわりかた具体的に書いてあります。鉈で割ったって書いてありますね。それで試しにこういうものを作ってやってみたんだけど、全然割れなくて、それで先ほど言ったように職人さんがやってくださった訳です。これが出来たものですね。割り板です。ここが守矢家っていう古くからの神社で、こ

こにちっちゃな社があって、この山に、この山が神様の山じゃなくってこの裏に一五〇〇メートルの守矢山っていう神様の山がある。そこに向かって拝んでる。この辺は私がもうほんとに子どもの時から育った場所です。伝統の民家で、伝統の民家風にやればいいってことがあるんですが、ただ伝統の民家風ってのは、日本では各地の民家って形が成立したかって言いますと、だいたい江戸の初期ぐらいなんですね。それまでは、ほとんど日本の民家ってのはなんか小屋みたいなもんだったんです。もちろん、神社とか、公家の家や天皇の家は違いますけど、普通の民家ってのはほとんど小屋みたいなもんで、建築になってないんですよね。あり合わせのもので作った、小屋だったんですが、それが大体江戸の初期とか、まぁそのもうちょっと前くらいからポツポツこう一応形式っていうのは出来始めたんです。ですから、この守矢家の信仰っていうのは、縄文時代の信仰を持ってまして、なぜそんなこと解るかっていうと、初めて稲作をやった時の話が伝わってるんですよ、この守矢家に。どういう事情で、我が一族は稲作というものをやるようになったか。で、それくらいに稲作を覚えた時の話を伝え、まぁ大変な色んな事件があって稲作を覚えるんですけど、それぐらいの非常に古い家なんです。ですからあんまり近世、中世末くらいから始まる民家の形式をやってもしょうがないってことで、まぁいっそ国籍不明でいいから古いものへ戻ろうってことで、出来るだけ何となく私のイメージの中にある古いものを作っていった訳です。で、これが板ですね。これまたいいもんなんですよ。手で割った板ですから、不規則でね。でもね、おかしかったですけどね。

この全形ですけども、こういうの作った訳ですよね。ちょっとこういうの言うと、田舎の人たち、田舎のおじいさんおばあさんは何て言うかっていうと、これめちゃくちゃおかしかったんですけど、せっかく作るんだったら新しい建物にしたらいいだろうに。それでね、おかしかったんですよ、おばあさんはね、ここね、お蔵はなんで昔のものにしたんですか、って。よく見ていただくと、こんなお蔵ないんですけどね。こんな壁が傾いたような。で、でもね嬉しかったですね。地元のおじいさんおばあさんから見るとむかーしから建ってるように見えるんです。我々建築の専門家から見ると、絶対にこんなもの昔なかったって知ってる訳です。その辺が非常に私としてはうまくいったな、と。地元



神長官守矢史料館

の人から見るとなんか昔からあるみたいだし、専門家から見ると、とてもこんなものは長野県には昔からなかったってのがわかる訳ですが。これが、えーっと、そこそこ評価されるようになる訳です。まあ一部の人たちに。で、この柱が突き出してる、これが御柱。僕は子どもの時からずっとこの御柱は氏子としてやってますもんですから、御柱のかんじに。で、まぁ幸いなことは、ここからこう突き抜けて、地元の人たちは何とも思わない訳ですよ、おぉ御柱かって、他でやると大変ですけどね。なんで柱が屋根貫くんだ、っていう。地元では、あぁ、そうですかって御柱ねって。ここに「薙鎌（なぎかま）」っていう、聖なる木に打ち込む鎌があるんです。これは諏訪大社が絡む、聖なる木を打ち込む大事な境に立った時とか、御柱に使う木にこう打ち込む、まぁ、それを打ち込んで、普通許されないんですけど守矢家ってのは諏訪大社のも最も古い神官の家ですから、まあやっていいっていう。で、石は地元の「鉄平石」っていう石ですよ。

　これがね、一応、一部の人たちの間で評価をされて、年に一つずつぐらい仕事がくるように、ですから僕自身はあんまり建築家になろうと思った訳じゃないんですよね。たまたまそういう人間関係で作って、ただもう一個は、この神長官守矢家の非常に原始的な縄文時代の狩猟に対する祭祀を、神様に対する神事を知ってましたからね、現代の日本の建築家はちょっと誰も出来ないっていうのがわかっていましたから、自分でやったんですけれど。意外にもそれが一部で評価されてぽつぽつと仕事をするようになります。

　これはちょっと学術的なんですが、日本の昔の製材がどうやっていたのか、というスライドです。北斎の有名な絵ですが、近代の機械でやる鋸が入る前はこういう幅の厚いので挽いていました。前挽大鋸（まえびきおが）という江戸時代に出来ます日本独自の鋸です。それ以前はこういう鋸で、中国から、鎌倉時代末から室町時代にかけて入ってくる二人で挽く鋸です。この鋸以前には、鋸っていうのは作れなかったんです。鋸っていうのは、鉄の技術からいうと、刀より遥かに難しいです。何故かっていうと、薄い鋼を全部焼入れしなくてはならない。真っ赤に焼けた鉄を水の中にじゅぶっと入れるわけです。そこでものすごくゆがみが出るんです。これだけの長い薄い鋼を焼入れする技術っていうのは、今から一千年くらい前までしか出来なかった。中国でそれができてすぐ日本には入ってきて、中国でも田舎に行くと未だにこういう技術を使ってますが、製材が可能になったんです。

　それ以前の製材は楔で割っていたんです。それはもう平

安時代の絵でもわかりますし、記録でもわかるんですが、楔で割るよりもっと前はどうしていたかというと、どうも石で、新石器時代など日本では縄文時代の鉄が入る前でも、板を作っていた可能性があります。これは何故かっていうと、アメリカの、ネイティブの人たちは、鉄も青銅もなかったんですね。それをヨーロッパの人たちが、アメリカ大陸に行った時に、彼らが板を作っているのを目撃して大変驚くんですね。それの記録は、むこうの本を読むと出てくるんですが、立ってる木から板を取っている、っていうんですね。立っている木からどうやって板を作るんだろう、長らくわからなかったんですが、アメリカの航空博物館であるスミソニアンという博物館がある。そこの年報みたいなのを読んでいたら、ひょっこりそれが報告されていまして、おおっと思ってびっくりしたんですが。

それでは日本でも縄文時代に行われた可能性のある、日本ではまだ板の発掘がされてませんが、石器時代の板の作り方、おそらく人類最古の板の作り方。柱は作るのは簡単なんです。丸い柱持ってきて四面を石の斧で削れば、石器時代でも充分にできる。板がどう作るか。それにならって、昔のアメリカのインディアンのやり方ではないんですが、僕はそういう古い技術があるとやってみたいんですよね。二作目の秋野不矩美術館というのを作ったときにやっている写真です。楔を打っております。秋野不矩美術館というのは、秋野さんという絵描きがいて、今は浜松市ですけれど、北の方の天竜って言う村にいて、文化勲章をもらった方ですが。その方の美術館を作るということで、それが墨の町なんですね。市長に言ったら、じゃあいろんな実験してもいいよ、ということで。割り板を昔の技術で作る実験をしているところです。

こちらは秋野さんのお子さんで、ものすごくこういうことが好きな人で、二人で一緒にやっているところです。これがなかなか割れなくて、鉄の楔で割れないから、木の楔を打ち込んでようよう割ります。こういう風に割れるわけです。これが楔の跡です。これで一応市に対しては棚とテーブルを作るということで、ちゃんとお金をもらってやってるわけです。それでこれの割り方だと、この次にどうやって割ったらいいかわからない。この次に横からやるとすべって割れないんです。もしこのやり方でやったりすると、一本の

秋野不矩美術館外観

丸太から二枚しか板が取れない。ものすごく無駄なわけです。削るわけですから。裏側も。まさかと思ったけれど、ちゃんと調べたんです。鎌倉時代の建物の床の年輪を調べたんですけれど、そうしたら、年輪が向かい合う板は一組ずつしかなかったんです。どうも、大昔の人も一本の木から二枚しか板を取らなかったということが、細かい年輪の調査でわかりました。ですから、こうやって作っていたんです。この表を削るわけですね。非常に無駄の多いことをやってたわけです。板というのは。

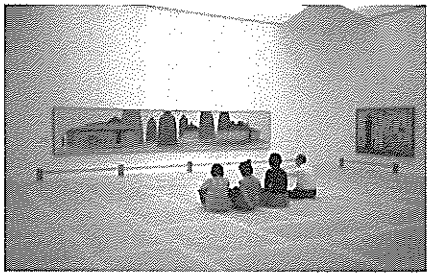
これが秋野不矩美術館の中です。ここに椅子がありますね。木はですね、三本の柱を立てて、三メートル位ある杉の木を山へ行って選んで、チェーンソーで削ったんです。粗っぽくしたかったんですが木の灰汁が出てきて汚くて、どうしようかと思っていて、「そうだ、燃やせばいい」と思ってね。現場の監督さんに「出来た後、燃やして仕上げますから」と言ったら最初キョトンとしているんですね。「燃やすってどうするの?」「いや、バーナーでがーっと燃やすんです」「いや、そりゃ火事になる」

火事にはならないんですね。太い木は燃やしても自分では燃える力がありませんから、バーナーをはずすと炎が消えちゃうんです。「いや、大丈夫だ」と。それで彼も納得したんですが、でも「嫌だ」と。話を聞いてみると「精神的に嫌だ」と言うんですね。そりゃそうかもしれない。自分がちゃんと建てた後で、いくら設計者だからといって来ても燃やすのはねえ。でも僕は、こんな汚い色の杉は嫌だから、ここは汚いままで人が触ると墨が付きます。だったら製材所の段階で燃やしてくるならかまわないと言うんですね。現場に、製材所から燃えた木が届いたら、自分はそれを組み立てるのはやる、と。で燃やしたんですけれどね。もうちょっと燃やせばよかったんですけど。あんまり効果なかったという気がしますね。やってみないとわからない。燃えた木なんて試した人はいないから。

これは中です。美術館としては非常に画期的なんですけれど。何故画期的かというと、土足を禁じたんですね。これがなかなか大変でね、天竜市って小さな市で、今浜松市に吸収されましたが、土足をやめて靴を脱いであがりたい、ということを僕が言ったらですね。僕がそれを思ったのは、ヨーロッパなんか行くと、子供達なんかが座らされて、普通の観客が上のほうにいて、先生や学芸員が絵の紹介というか、しているのをよく見るんですよ。土足の国で子供達は座るんですよ、大人は座らないんです。だったら日本はもともと靴脱ぎの国なんだから、美術館だって大人も子供も靴脱いで入っていいだろう。僕の理想の美術館って真っ

裸の美術館なんですよ。絵と直面するってよくいいますけど、本当に裸で絵を見る、と。それは公共ではまずいと。せめて裸足くらいはいいだろうと裸足を提案したんです。そうしたら大変でね。市の建設委員会で、日本の美術館で靴脱いであがるところはあるのか?と。そう言われればないんですけれどね。世界はもっとない。もっと言われたのは公共建築で靴を脱ぐというのはどういうことだ、と言われましてね。僕もけっこう、いろいろ変なことをやりますけれど、施主を強引に説得するということはあまりしないんですね。「しょうがないなあ」と思ったんだけど、でも面白がってからかい半分で発言してみたんです。これインドの絵ですけれども、秋野不矩さんって日本画家なんですよね。で「日本画を土足で見るとは如何なものか」と冗談っぽく言ってみたら、けっこう面白い。人間って変なもんでね、「土足＝日本画」って繋がって、これはマズイってことになるんです。そして皆が「そういえばまあ、日本画は床の間にあるもんだ」という話になって、靴を脱いで良いということになって、靴を脱いだ。その結果何が出来るようになったかというと、床を白くできた。これは白大理石です。畳一枚あります。横になってもいいんです。畳一枚の原石を六センチの厚さに張ってありますから、横にもなれるんですけれど、さすがにいない。大体座っています。

秋野不矩さんって方は、ものすごく絵を低く掛けるんです。ものすごく身長の低い方ですから、そのせいだと思いますが、子供くらいの身長しかなくて。で絵を低く掛けたこともあって、ここに邪魔なものがありますけれど、人が側に行っちゃいけないというものが置いてありますけれど。これは私が置いたものじゃありません。その結果何が出来たかというと、床を白く出来たでしょ、そうするとね、乱反射が起こるんです。白だから、床が。すると絵に影が出来ない。ここから光が来ているんですが、この辺で乱反射してますから、影が出来ない。美術館の照明が良いか悪いかはここの影で見てください。酷い美術館になると、この上の額がねえ、額がいかん、という訳ではないんですけれども、日本だと額がないですけれど、向うだと一〇センチくらいの影が出るんですよ。名画は。そうすると額の影が落ちる。普通だいだいこっちには落ちないんですけれど、下にはでる。これを見ると出ていない。乱反射のおかげです。更に



秋野不矩美術館内観

実は、この壁とこちらの壁との境がわからなくなる。床と壁との間もはっきりしなくなる。天井とかも。その結果、一瞬だけですけれど、この部屋に入ると絵が浮かんでいるように見える。白い空間に。しばらくするとわかりますけれどね。このガードが邪魔ですけれど、部屋に入って絵以外がない、という状態がどんなに心地良いか、ということがここに行くとわかります。不矩さんの絵がまた自然な感じでね、ざらっとしたかんじでね、岩絵の具ですごく雑に、乱暴に描いてますけれど。非常にこの空間と合います。私のやり方が上手くいった例です。

これは熊本県立農業大学校ということで、今、木と取り組んでいるんですが、木を曲がったまま使いたいんですよね。曲がったまま削る鉋が世界で日本にしかないんですが、曲面鉋っていうんですが、これは神社の板の曲がったところを削るためとか色々使うんですが、曲面鉋で今、私が見本を見せているところです。真っ直ぐっていうのは口で言えるんです。はい、まっすぐって。ただ、曲がったというのは、口では言えない。やって見せるしかない。一応木のなりになりながら、でもあんまり雑じゃ嫌なんで、その加減が難しいんですよ。あんまり雑じゃ困るし、あんまり手抜くのも困る。その辺の微妙な加減が難しい。僕がよく言うのは素人が一生懸命やった位、プロが酔っ払ってやった位。ちょうどその辺がいい。素人の私が一生懸命やっているところです。

僕はとにかくこういう屋根が突き出すのが好きなんです。基本的に来た人に向かって石を投げるようなかんじ、砦みたいな感じが好きです。僕ら子供の頃は陣地といって、今の子供たちは基地といっていますが、そういうのが好きなんですよね。こういうところで男っぽいかんじが好きなんです。男っぽいが子供っぽいにいってしまうのがありまして困るんですけれど。これはものすごく大きい建物で、廊下だけの長さが四〇〇メートルあるという。二〇〇人が住んでいるんです。広大な敷地の中で、中庭四つあって、学校と寮との間に築山作って、一メートルくらい築山の道があって、ちょっと気持ちが良いんです。ずっと上がって下りてくる。すると向うに見える。

これがさっき削っていた松の柱です。こういうかんじで。だから変じゃないんですよ。ちゃんと乱暴さの度合いをコントロールすれば、それがちょっと難しいんですけど。この辺は敷地に生えていた板をひいて。これは檜です。これは私がデザインした、と言っても板を挽いて足をつけただけですが。

これが中庭です。こういうかんじが四つあって、突き当りの所が食堂になってまして。普通、建築家というのは、

大きな空間というのは柱をなくすんです。食堂の場合、大空間というのは必要なくて、柱はできるだけ林立させて森の中でご飯を食べるようにしたい、と。農業大学校ですから。で、これをやったわけです。実際問題として、ここも大空間ですけれども、この中に柱があっても変じゃないですよね。邪魔にならないんです。例えば仮に教室だったとしても、授業が嫌な人は柱の陰に居ればよいし、先生の声さえ聞ければ良いし、何か書いているんだったら、顔をちょっと動かせば見えるわけですよね。だから、ある思想なんですよ、実は大空間が良い、というのは。近代的な思想ですけれども。近代的な思想というのは、必要なのは大事なんですけれども、そうでないものもあって、柱をできるだけ作ると、構造的にも非常に楽なんです。これはできるだけ使うようにした例です。変ではないですよね。やってみれば別にどうってことはない。

これは竹と取り組んだ時です。大きなスキー場の、リゾート地ですが。冬の間、夜スキーが終わったあと、皆が集う場所を作るということで、二階部分の空間を与えられて、そのインテリアだけを私がやりました。空間が広かったんですよね。四十人くらい収納できる、という割には面積が広かったんです。竹篭を作って、その中で皆が集うようにしてみよう、と。右が竹屋さんで左が私ですが。一緒にどのくらいのかんじで編むかを二人でやっているところです。

これはですね。工業製品を使った例です。屋根を自然素材でやる、ということは絶望的にお金がかかるんです。僕は初期のものでは、鉄平石という石を使いました。これがものすごい値段なんです。普通のでは出来ないんですね。銅版がわりあい自然素材と合うんです。何故かというと、銅版は手で曲げられますよね。それから風化していく時に美しいんです。工業製品っていうのは、たいてい風化すると汚くなる。これは非常に面白い問題で、おそらく汚くなるわけじゃなくて、人間が汚い、と感ずるだけなんですけれども。鉄が錆びていくのを汚い、と感じますね。あるいはコンクリートが汚れていく、というのを汚く感じますよね。ただ土の壁がだんだん崩れていくってのは風情があるっていうんですね。起きていることは同じことなんですが、ようするに風化しているんですが、人間は工業製品の風化は汚く感じるし、自然のものには味がある。特に日本の人はそういうお茶とか古色を帯びたものを好みますから、別に日本だけではないですけど、割と高い教養を持った文化は、時間が経って風化していくことを受け入れる美学を持っているんですが。工業製品はだめです。一番現代的な工

業製品ってプラスチック系ですけれど、プラスチック系が風化しているのを見ると本当に汚く思うんですね。そんな中で銅版は、工業製品でありながら、数少ない自然素材とあう、つまり風化の美しさ、手の痕跡を残せる、ということで。今銅版を外壁に使っているところです。

これは顔を見るとなんとなくわかりますけれど、細川護熙さんです。ここはですね、細川さんが首相を辞めた後、湯河原に引っ込んで、焼き物をやっているんですが、その工房を作りたいと思ったんです。で、たまたま赤瀬川源平さんと対談したときに、言ったらしいんですよ。自分は子供の時に家に出入りしている職人の中で、良いと思ったのは植木屋と大工で。将来大工になりたいと思ったんだけど、小学生だか中学生のときに「おまえはお祖父さんのあとを継いで、首相を目指せ」と言われて。お祖父さんは近衛文麿さんですから、政治の道に入って、首相をして引退したんで、大工みたいに、自分が手を入れて工房を作りたいと話をしたんです。赤瀬川さんがそういうことだったら藤森さんに頼めば、ということで私が行って設計をして、細川さんと一緒にやっているところです。

銅版をこういう風にべこべこにして貼っていきます。銅版をべこべこにするのは、非常に職人は嫌がるんだけど、別に全然かまわない。これが全景です。こちらに湯河原の別邸があって、右手に工房があって、左が窯場です。広場になっていてここで作業の、干したり、洗ったりいろいろやる。ここに温泉が湧いてまして、垂れ流しの温泉で、水鉢を作っております。

これがそうです。左が窯場で右が轆轤場です。間をすっぽり抜かして、屋根をつけます。こういう銅版はプロはやらないんです。こういうでこぼこは嫌がって。これは全部私の仲間が行って、縄文建築団という名前がついてまして。技術があまりにも拙劣である。拙劣でありながら恥じてないというところが。赤瀬川さんとか南さんとかいろいろいるんですが、こうやってみると変じゃないです。もちろんこの屋根はプロがやっているんです。これを素人がやると雨が漏りますから。ここは全部素人がやっています。

これがそうです。全然変ではないですよね。ですから結構人間ってね、きれいでまっ平ら真っ直ぐでなくても、当たり前ですけれど、あんまり変だと思わないですね。逆にこれが味があると思えれば思うんです。

例えばですね。どういうような不安になるかというと、あとで言うことにもなると思いますが、「あなたの家の屋根にニラを植えたい」と言われると不安になるわけです。だけれども「あなたの家に茶室を作りたい」と言ったら、あとはも

う決断の問題で、お金がかかったり、手間がかかったりしますが、やろうかどうか、ということになる。本当にありがたい。つまり小空間を作る条件が日本には整っているんです。これもこういうことで作ってうまくいったんです。

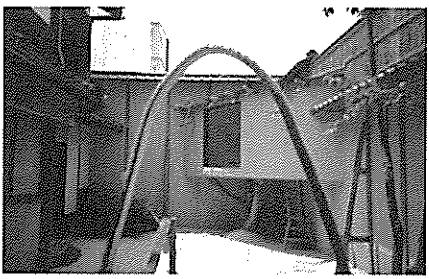
空中に浮かした茶室を作ろうと考え始めました。空中に浮かすための庫裏です。先ほど言いました、秋野不矩さんのご子息は、京都のお寺の住職をしてまして、そのお寺の住宅部分の裏の小さな庭の隅っこに小さな茶室を作ろう、と。浮かす茶室を作ろうと。これが土台の部分。ツリーハウスのような茶室です。

等さん、というのですが削っているところですね。地元で削って、これは全部素人がやりました。削って京都に持って行って。京都の裏庭に坪庭があって、既存の塀があります。そこの隅につけます。この塀は地震が来たら倒れること請け合いないい加減な塀なので、それとは別に独立させて、ここに新しい板壁を建てております。ここにさっき運んできた檜が。L字型の板壁とこれと三本で土台を作る。三分の二位の主な加重はこっちにきます。あとの三分の一位は、こっちに。こうやって上に作っていくと。ここここは繋がない。繋ぐと向うに引きずられて倒れてしまうので、独立させています。

縄文建築団が来て、壁を塗ってますね。見るとわかりますが、皆なんか変でしょ。この人なんて姿勢がちょっとね。こんな格好しないですよね、普通。ヘルメットが似合わないとか、いろいろあるんですけれど。これは南仲坊さんです。今はもう、「ここ漆喰やってください」というと捏ねて全部やってくれる。一応旅費と宴会代は払う。人件費は払わない。人件費を払うと労働になってしまうので。一応ゴルフやるようなかんじで。

仕上げに泥を塗ってまして、壁の泥と実はちゃんと段差があるんですが、一見壁に引っ付いているように見えます。ずっと入っていって、ここからにじり上がる。にじり上がり口で。緑の彫刻っていうのがずっと興味があってやっているんです。上手くいかないんですけれども。これは芝生で作った彫刻です。この細さでやってあるんですが、わずかな土と中に配管がされていまして。

僕はル・コルビュジェという人がすごく好きで。コルビュジェという人がやった、ソビエト・パレスというのがあって実は出来なかった。



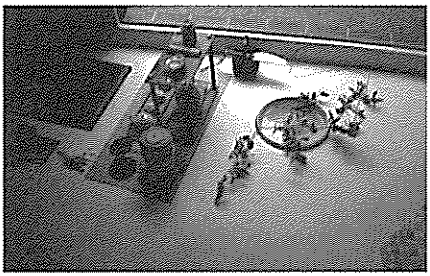
矩庵外観 1

大変コルビュジェも生涯残念がったんですが、それにこういうアーチがあるんです。それへのオマージュです。もう一個は僕はシュール・レアリズムが好きなんです。ダリは嫌いなんですけど、シュール・レアリズムをかんじさせるものというと、やはりダリが一番上手いんですね。ダリのぐにゃっとした時計がありますよね。あれを、ぐにゃっとした芝生を。これを作ったのは良かったんです。

ところがここはお寺ですよね。お寺というのはおばあさんが支えているんです。おばあさんはしょっちゅう来るわけです。自分が近いわけだから。あんまりおじいさんはこない。檀家が来るわけです。古いお寺ですから。極端に言えばおばあさん達の力で、お寺というのは成立しているわけですよね、経済的には。おばあさん達に聞かれるわけですよ。秋野不矩さんの、お寺の和尚さんは、自分は現代美術っぽいことをやる人ですが、言うわけにはいかないんです。コルビュジェとかシュール・レアリズムとか。困るんです。先ほども言いましたように、人間ていうのは変なもので、説明がつかないとすごく不安になるんです。変な疑いを持ったりして。で、おばあさん達に説明を求められて、困ってね。僕も困って。でも説明しないと、ダリだ、なんとかだ、というと非常に失礼になりますので、おばあさんというと、とふと思って。天国の門というとキリスト教の概念で、あんまり仏教の場合はないんです。で、これは三途の川ですと。三途の川を渡って、天国の門をくぐって、これがハスの花です。皆がおお、と喜んでくれて。一応檀家からきているお寺のお金をちゃんと使った、と。上手くいった。

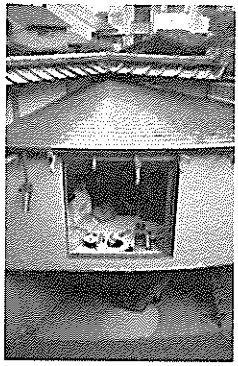
これが先ほど言いましたけれど、手水鉢があってここで手を洗って、飛び石をやって、三途の川があって。二階からの眺めです。とても面白くて、これが京都の町です。塀で、まさかこんなものがあるとは思わない。抹茶ではなくて、抹茶というのはいわゆる茶の湯、千家がやる、中国の古い形を伝えている、中国では滅びちゃったんですけれど、もともとこんなになかったという説もあるんですが、いわゆる煎茶というものです。小さな器で、粉でやるんじゃなくて煎じるんですね。煎茶を茶道化したもの、小川流というのがあるんですが、小川流の家元の小川後楽さんが来てやってくださった。

普通の茶室と違うのは、一・五メートルくらいの段差で、茶室というのは基本的なことをいうと他の空間



矩庵内観

と違う小世界を作る、別世界を作る、ということです。その気分を盛り上げる。にじりあがっただけで、だいぶ気分が変わります。非常に不思議な感じがします。普通の茶室というのは、窓をつけちゃいけない。外を見ちゃいけないんです。手元を見る。それがすごく鬱陶しいんですよね。こうやって大きく開けて、やっぱりちょっと開放的だけれども、外とはつながっていないんです。ちょっと切れて。一・五メートルくらい上がりますから。不思議な印象で結構好評を博しておりまして、いくつか頼まれるんですけれども、あまり作る気がしない。他人のために。



矩庵外観 2

なんていうか、公共建築とか住宅と作っているときの気持ちがちょっと違うんですよ。なんか工芸品を作っているようなかんじなんです。もう克明に手が入りますから。コスト的にもそういうことで、お金が使えるわけですから。手を入れてくとなんか他人のために、こんな一生懸命に自分がやったものをやるのやだな、と思うようになります。だから、知っている人はそれは友達だからいいんですけど。殆ど頼まれても、知っている人のやつしかやらない。

もう一個、家を作るというのは、住宅系というものはずっと作っている途中でわかるんですよね。夫婦の関係とかですとか、経済的なこととか。当たり前ですけど、職業上の秘密ですよね。わかるんです。そのあとずっとメンテナンスということがあるんです。雨が漏ったとか、なんとかがどうなったとか、台風でどうなったとか。ずっと基本的に一生付き合いになる。

てことはどういうことかというと、親戚になるんですよね。嫌な親戚は増やしたくないですよね、この歳で。住宅作家という人はどうやっているか、というと実は切っていくんです、それを。切っていかないとできないわけですよ、そんなに。年に十個も親戚が出来たら堪ったもんじゃありませんよね。時々行くわけですよ。なんかあるっていうと行ったり来てもらったり。そういう点で僕自身は知り合いの住宅しかやりません。知り合いの中でも、本当に親しい人にプレゼントするような住宅。もちろんお金をもらって、プレゼントするんですけれど。

これは細川さんに頼まれて。先ほど工房が出来てしばらくしてね。贅沢なもんだと思いますが、戦前からの権威の威でお湯を垂れ流しているんです。今は絶対許されないけ

れども、戦前の近衛家がそういう権限を持っているんです。それはともかく。突然電話があって、ひと月で茶室を作ってほしい、と。ひと月って。利休は一週間で作ったぞ、と言われて。そりゃあそうなんですが、利休は中国攻めに行く秀吉のために利休屋敷に一週間で茶室を、つまり利休屋敷に届くのが一週間後。秀吉が中国攻めに行くときに利休屋敷を通る。その前に、そこでお茶を飲んでから中国山陽道を下る。秀吉はしょっちゅう利休屋敷には来てましたから、どういう茶室があるか知っていた。利休は一週間で茶室を作るんです。秀吉を迎えると秀吉がものすごく喜ぶわけですね。自分の出陣のために作った、と。

で一週間。細川さんのご先祖の細川忠興というのは、利休の弟子が十人いたその一人ですし、とりわけ特別な弟子で。利休が切腹を仰せつかった時に見送りに行ったのは二人しかいなかった。他の連中は皆怖かったわけです。見送りに行ったら、ようするに秀吉になんかされるのではないか。古田織部と細川忠興が行くんですが、古田織部はその後殺されるわけです。もちろん古田織部は他の事情で殺されるんですが。細川忠興は殺されなかった。つまりもっというと、本当に命がけで利休を支持した人ですね。当然ですけれど、細川さんは山ほど知っているんですよ、そういう話を。ひと月でできないか、と言われて。ひと月で・・・、となったときに、結局俳優座の人たちに舞台の技術で作ってもらった。仕上げは縄文建築団がやりましたが、骨格は俳優座の人たちです。俳優座を思いついたんですよ、僕は。そうだ！舞台の連中だったらあっという間に作る。俳優座に言ったらね、本格的な建築は作ったことがないから、是非やりたいって。

やってくださって。おかしかったですけれどね。全部パネルで作ってきて、現場で半日で組み立てましたよ。あまりの速さに「一夜亭」っていう名前がついてます。一夜もかからなかった、半日です。おかしかったですよ。全然技術の体系が違うんですよ。これは中にアルミがいっぱい入っている。僕らなんて建築でアルミ使わないんですよ、高いから。あの人たちはね、アルミ高いでしょ。高いけれど、運搬と組み立てる人夫が減るから楽になるって。俳優座の人たちのモノを造るときの命は、公演終わりますよね。そうすると二日後に他の地方で公演が始まるなんてことがあるんです。いかに軽く人数少なく作れるか、なんです。ようするに運搬費なんですって。運搬費を考えると、アルミ使って建材の値段が高くなるけれど。アルミでやってくれたんです。本当にちがう。建築でアルミなんて考えられない。こんなに見えてますけれど、中はアルミで作られている。

ちょっとこれは大きいと思うでしょ？にじり口が。これ

は大きいんですよ。何故大きいかというと、実はひと月で作れ、と言ったのはシラクがくるから。フランスの。シラクと細川さんってものすごく仲が良い。シラクがにじり口でつかえた、ってことになると困りますし、みっともないですよね。嵐が来たら、つかえたまま壊れちゃいますからね。大使館員が来たりするんですよ。シラクが来るのに合わせて始めたら、来る直前にイラクの戦争が起こってシラクが来れなくなった。ですからこれはシラクの寸法になっているんですけれど、シラク仕様なんですけれど。ちょっと、だから広く大きいです。

これが中です。普通の茶室と違って、まず床の間がないですからね。炉なんか適当に切ってある。炉の周りに変な袖みたいなものがあって、鍋もやりたいって言ってたので、囲炉裏のように使いたいと言っていたので、炉口を大きくしてやっております。囲炉裏用としては今のところ使っていないそうです。

大津絵の、さすがですね、良いもの持っておられる。細川さんは永青文庫っていうそれこそ国宝を持ってる、お茶道具の細川家の、永青文庫の理事長さんなんですよね。細川家の大コレクション。ですからこれをやる時に、「永青文庫からなんか持ってきて」なんて言ったら「ありゃあ先祖が集めたもんで、俺は好きじゃねえんだ」とか言って。なんかあるみたいですよ。先祖の集めたものでやりたかない。やっぱり自分で集めたい。これらは細川さんが自分で集められたものです。

不思議な感じでね、何か漫画っぽいんですよね。何故かっていうと建物が小さいのに、わりと大きな建物の形で作っている。だからスケール感が変になるんです。人がだから相対的に大きく見える。相対的に人が大きく見える、というのは当たり前ですけれど漫画のやり方で、顔が大きくなるともっと漫画っぽくなるんですけれど、さすがにそれは顔まではねえ。これは私の家内で、赤瀬川さんの奥さんで、南の家内です。そして細川さん。一応茶室開きを、シラクが来れなかったので、我々が呼んでもらって。

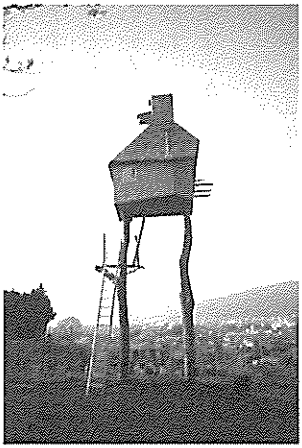
ずっと登っていって、こうなる。おかしかった、漫画っぽくて。でもこの高さだけど、これだけ上がっているだけですからね、このにじり口の所で三〇センチ、ここで一・五メートル位です。この位上がっただけで、すごく雰囲気が変わるんですね。ああっ、と思いましたよ。

次はですね、他人のものを作っていて、もう自分のものが欲しくなってしょうがなくなった。いよいよ自分のものを作るときは、やっぱり他人と同じじゃこまりますよね。他人を圧倒させるものじゃなきゃ、ということで、なんと

か圧倒しようと作ったものですが。これは、栗の木を私の田舎の裏山から切り出してきまして。こういう仕事は、全部幼馴染の、子供のときから知っているいたずら仲間が、みんな大人のいたずらみたいにやってくれて非常に助かるんですが。

これいま、畑に立てているんです。ここの六メートル上に茶室を作る。これはね、ほとんど自分や友達の大工さんや縄文建築団に頼んで、ずっとやったものです。柱がずっときてて、上に床を作って、木の幹と床を繋いでいる。ここの繋ぎ方を上手くしっかりしないと、台風のとき飛んでいきますし、木に変な加重がかかると折れるんですよね。ものすごく苦労しています。

これが下から見上げたところ。二本柱が立っていて枝が分かれていて、ここに絡めて作っています。幼馴染の大工が来て手伝ってくれている。



高過庵外観 1

屋根の銅版をまげて作っている南仲坊。さて出来たんです。こういうかんじです。ここから六メートル、てっぺんまで一〇メートルです。階段がついていて、登ってこう行きます。梯子になっていて。こういうかんじでね、登っていくんです。踊り場の所で。この梯子は日頃は外して、別の畑のところに置いておきます。そうしないと危ないんです、子供がね。村の子供、僕の後輩達がここら辺で生きているわけですから、危ないんで。これが六メートル、ここが一〇メートル。窓を開けると向う側が見えているんで、ちょっとへんな感じですが、ここに炉があって煙がでる、と。

高過庵内観

高過庵外観 2

これでね、しめしめと思って。ようするに自分の茶室は印象深く作りたかったんです。こういうかんじですね。なかなかね、自分で言うのもなんですが、揺れますけれどね。座っていればいいんですけれど、歩くと揺れるんです。おかしかったのはね、外から見てて揺れる。一〇センチくらい揺れるんじゃないかなあ。外から見るとわかるもん。こう揺れ始める。

これが炉があって、一応煙が。縁側みたいなパタンと出すようになっていて。外を見るとこういうかんじで。ここが先ほど見せた神長官守矢資料館。私の家はこの辺で、守矢家がこの辺で、ずっと畑があって。ここでね、ある発見を私はしたんですね。純粋な農業をやっている人はいないんです。だいたい日曜日になると親子で来て、自家用の野菜を作っているんです。そこで畑を耕している人たちを見ていたんです。そこでとても不思議な感じがするんですね。畑を耕す人たちはこちらをふりかえることはしないんです。だって、毎日建っているわけですから。普通に作業をして、水飲んだりして帰っていく。それを見ているうちになんか不思議な感じがして。神様ほど高くはないんですよね。当たり前ですけれど。表情がわかるの。やっている人たちの細かい表情がわかるの。一緒に働いているかんじの表情だとか、嫌になってさぼりたさそうだなとか、汗かいてるとか。地上で見ているのとはやっぱり違うんですよ。表情がわかるくらいちょっと上。だから神様と人間の比較的人間に近い辺で、人間よりちょっと越えた視線なんですよね。とても見てて面白いんです。見てて飽きないんです。皆が種まいたりしているのを見ている。

ＮＨＫでずっと撮っていたんですよね。その美術担当のディレクターがものすごいいいことを言ってきた。「ブリューゲルの絵みたいだ。」それで僕は「ああっ」と思ったの。実は僕はブリューゲルの絵がうんと好きで、知り合いの美術史の人にブリューゲルの絵が好きですと言ったら馬鹿にされたの。「なんで先生ともあろうものが今どきブリューゲル」みたいなこと思われて。ブリューゲルってそんなに今や古典、みたいなもんで。戦後のある時期、文化界をにぎやかした存在なんです、日本では。ブリューゲルがずっと好き。なんなんだろう、と思ってたら、ブリューゲルの全部ではないですけれど、けっこういう視線で描いているんですよね。ちょっと高いところから見てるんですよ。表情がわかるくらいのところから見ている。もう一つ好きだったのは、ブリューゲルの絵の登場人物はこっちを意識していないんですよ。

コルビュジェ先生は上野の西洋美術館を作った。その時

に日本のお弟子さんが、「先生、屋上庭園どうしますか」ったら、コルビュジェはねえ「まあ、ちゃんと作らなきゃいいから、水槽みたいなものを置いて、そこに土を入れて、なんか植物を植えといてくれ」って。あんまり先生やる気ないんだなーと思いながらやって、枯れたんですよね。管理が悪くて。で先生に電話したら「もうほっといてくれ」って。ようするにコルビュジェはやりたくなかったんだと。実はコルビュジェは一作ちゃんとやって、それで懲りたんですよね。植物というのは建築にあわない、って。だけど口で言った手前、やるんですよ、こういうこと。これがそうですけれど、絵で見るともっと本当は植物があったんですよ、昔は。スケッチですけれど。これはサヴォア邸ですけれど、植物を隠しているんです。屋上庭園、といいながら。これが日本の屋上庭園です。サヴォア邸より前です。世界最古の屋上庭園が日本にあります。大正三年です。

これは屋上なんですけれど、ちゃんとした庭園になっています。やっぱ建築と合わないんですよね。合わないでしょ？なんか。知らないと後ろに山かなんかあって、神社がなんかあると思われる。実はこれ茶室なんですけれど、茶室にシャチホコは戦せないと思うんですけれどね。ちょっとかわったおやじなんですよ、こういうことをやるのは。しゃちほこ付きの茶室作って庭造ったんですよね。でもこれは合わない。現存世界最古です。この次のがロックフェラー・センター。その次がコルビュジェ。庭とはいえない庭ですね。

ドイツのエコロジスト達の奥です。ディープになっていくと、こうなっていくんですよね。だからフランス人がドイツ人も嫌がるのがよくわかるんですよね。世界を何度危機にさらしたか、っていう。ここまでやるか？とも思いますよね。エコロジーだと言って。これでは普通ではゴミ捨て場ですよ。でもドイツ人はやるんです。だからドイツ人をフランス人が嫌がるのがよくわかります。こういう人が隣にいたらいやですよね。本当に。これはちょっとやりすぎではないかと。これがエコロジーかっていわれてもねえ。日本のエコロジストに「エコロジーとはこういうことか」と聞くと、皆が「これは違うんではないか」というと思うんですが、ドイツではこうやるんです。

やっぱり上手くいっていないんですよ。植物と建築を一体化する、というのは非常に美学的に難しいんです。それを何とか私はしたい、と思って努力しておるわけです。これは日本で行われた例。日本で屋上庭園というと、まずお金がいります。屋上庭園というのは一回分のお金を作れば、完璧な屋上庭園ができます。これは日本で行われた世界最大の屋上庭園ですけれど、アクロス福岡という、福岡県が

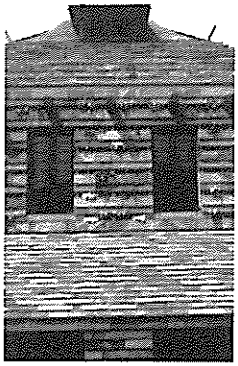
やったものです。ここが公園になっていまして、ずっと登っていくんですが、ここを降りてくる。誰も行かないですよ、ここ。私は行って降りてきたんだけど、ばかばかしくてね。でもすごく良く出来ています。世界最高の屋上庭園です。植物があって実がなって鳥が来たりとか、昆虫とか、ようするに生態系が作れるように非常に良くできているんです。美学上の問題があって、なんで建築家っていうのは、こんなことするのか。ここだけで済ませればまだ良い。この壁とこれを取れば、本当に山になるんですよね。だけど建築家はダメなんですよね。

僕としては何とかもっと建築と植物がうまく重なり合うように、植物を取り込みたいんですよね。これがなかなかね。本質的に矛盾しているとも言えるんですよね。植物の方は人類ができる、成立するもっと前から植物をしているわけですから、人間のこういう美的な、人間が作ったものと合わないんですけれどね。もちろん横に植える分には大変すばらしいんですけれども。取り込む、というのは難しい。

これが取り込んだ中で、比較的良いな、と思う例です。良いと思うかどうかというのも問題があるのですが。なんとなくアイスクリームのトッピングといいますかね。江戸時代の技術です。船番屋の上に木を生やした例です。これも草が生えている。もうちょっと手入れした方がいいんじゃないか、というかんじなんですが、でも面白いですよね。これなんか松が生えちゃっている。松はまずいんじゃないかって。これ後ろが杉の木で、ちゃんと屋根に生えている草です。

これはよく見ると上に桔梗が咲いています。これはけっこうよかった。これなんかは百合が咲いている。これなんか面白いでしょ。お寺の墓地の入り口なんだけど、見ればわかりますけれど、自然にこんなこと絶対おきませんから。百合の球根が歩いてきてここに整然と並ぶ。これは人為的なことで、芝棟と言って、屋根のてっぺんに草花を植えた技術を芝棟といいまして、日本では戦前までは日本中にあったものです。

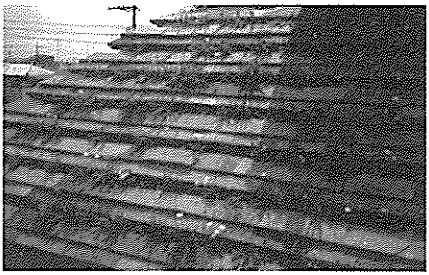
これが私がいよいよ自分の家で、タンポポハウスというんですが、やった例です。超高層タンポポ仕上げというのを提唱したんです。春はずっと上から、きっと上からタンポポが咲いてきますよね。そうすると「たんぽぽ前線本日三十何階です」なんてね



タンポポハウス外観 1

え。勧めている人だって見て「おお、今日はうちのところまで咲いたかなあ」とか思って部屋の中に入る。綿毛のシーズンになると、タンポポの綿毛がずーっと超高層を包むわけですよ。そこへ一陣の風が吹くと、うわーっとまるで水墨画の中のようにすっくと超高層が現れる。おまけに東京中のタンポポを支配しているアメリカタンポポを日本タンポポが駆逐していく、ていうようなことを考えたんですけれど、注文がどこにもないんで、自分の家でやったわけです。これが下地です。ものすごい下地で苦労する。

今ね、植木屋さんでひと夏かかって採取してくれた日本タンポポを植えてるところですね。芝棟風になっていて、



タンポポハウス外観２

タンポポハウス内観

ここに日本タンポポをためしに一株だけ植えてみて、流れないように、根を張るといいのですが、ステンレスの網を張っています。これが果たして春先咲くかどうか、という。咲かなければ苦労は水の泡ですからね。冬が来まして、ここにずっと帯状に植わって、この屋根にも植わって、てっぺんが芝生になって、ここにタンポポがあって。この角はですね、やっぱり僕の好み。来た人に石を投げたい、ということでやっているわけです。それで春先です。どうなったかというと、てっぺんで咲いたんです。拍手をしていただいたのは初めてですけれど。嬉しかったですよ、本当に。咲いた。ところがですね、わーっというのはスライドだけなんですよ。友達が来て下から見上げて「どこにタンポポがあるんだ？」確かにタンポポって足元で見るもんで。おまけにね、綿毛がこういう風にあるんだけど、綿毛が一気に来ないんですね。順に。だからたんぽぽの超高層を本当に作らなくてよかった、と思いますけれど。

僕だって一応社会人ですから、こういうことがそんなに一般的に好まれない可能性もある、ということはよくわかります。施主に最初にスケッチを見せるとき、屋根にちょんちょんちょんと、なんか曖昧にしてある。施主の方も気づくわけですよ。で、お互いちょっと聞きづらいの。こっ

ちは言いづらいし。全部細かく詰めていって最後になると、いよいよそこにくるわけですよ。構造だとか、大事なところには関係ないですから。旗が立っているようなもんですから。この場合はね、松にしたんですよ。施主もいいですよ、と覚悟していたみたいで。最近は来る施主は覚悟して来られるんで。でもちょっと出来たら大丈夫かな、と。実物見てないわけですよね、スケッチですから。普通の方って言うのは模型で作っても頭に入っていないですよ。驚くんですよね。当たり前ですが、図面だともっとわかっていない。「お見せした図面に書いてあったでしょ」と言っても「え?」と。ようするにわからないんですよ。模型作ったって頭に入らないんで、これ出来て引き渡し直前ですが、ちょっとねえ、なんか顔みたいに見えるんですよ。馬鹿殿様ですよね。頭にこんな変なものをのせている。施主が怒ったら切ってしまおう、と思った。引渡し直前が年末でクリスマスが近い時期だった。で、施主が許してくれたら、と思ってある仕掛けをしておいた。そうしたら施主がこれ見てげらげら笑って許してくれた。電飾なんです。本当に拍手喝采ですよ。福岡行くと、クリスマスの時期になると、こういう風に。

これは建築緑化を極端までやって、これ以上はやる気ないですが、限界までやった例です。これ以上やるとドイツのエコロジストみたいになるので。この辺が植物側に一番バランスを持っていった。これはなまこ壁という伝統のもので、伊豆大島にありまして、酒屋さんです。焼酎を造っている。こちらで醸造して、こちらで貯蔵して。彼は一人でやるんですよ。稼業だもんで一人でやって、原稿も書く。そういう知り合いなんですが。ここになまこ壁を、これは草屋根って言うんですよね、萱葺の屋根。本当の草の屋根です。萱葺は実際的には現在は禁じられていますので。上に椿が植わっていまして、椿城なんです。伊豆大島ですからね。継ぎ足しているものは足場です。植物を管理するための。

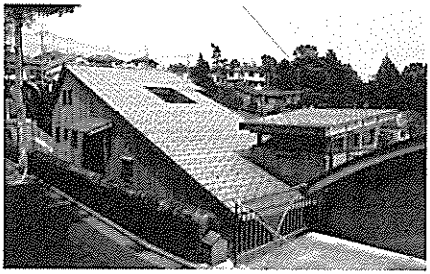
これです。なかなか気に入っているんですが、管理が大変らしい。私がしているわけではないですけど。もうなんか大変だそうです。でも一生懸命やってくれている。これは中です。

最後になりますが、植物植えた中で一番上手くいったのは、赤瀬川原平さんのニラハウスです。もともと最初からニラを植える気はなかったんですけどね。ニラを植える気が、といっても、普通の家を作ってあげよう、と思っていたんです。大変尊敬していますし、いろいろお世話になっているし、お歳も召していますし。ところが、「せっかく

君に頼むんだから、なんかちょっと面白いことしてくれないか」と。あれ言われた時はうれしかったですね。私の中には面白いことがダム状になっていますからね。ちょっと突付くとどーっと出てきますから。いろいろあるんですよ、私のやってみたいことは。

例えばね、純粋な木造建築というのを作ってみたい。それはどういう木造建築かというと、家の大きさのでかい丸太を買ってきてですね、玄関から彫っていくわけです。ずーっと、テーブルとか引き出しとか全部彫っていくわけです。階段とかね。それをやってみたい。本当はね、その大きさの木がどっかにあったら、生涯かけても良い、と思っているんですが、木がないんです。それとかね、ぼうぼう火事になっていて、火が治まるとそこに忽然と家が現れる、とか、いろんなことを考えているんですけど。なかなか上手くいかないんですが。

その中の一つで、二つ提案したんですよ。ここにずっと道があって、一段下がって家があるんですよ。二階から入

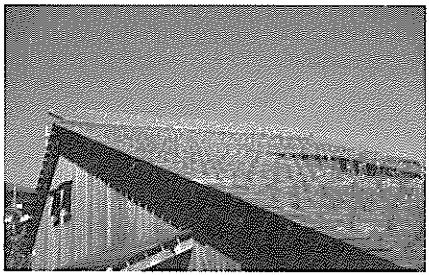


ニラハウス1

るんですね。坂道を上がって、ここを跳ね橋にしたい、と思った。赤瀬川さんは跳ね橋は嫌だ、というんです。僕は跳ね橋が憧れなんですよね。家を出るとき、ボタンを押すと「ぎー、ばたん」ですよ。それで帰ってくると、中から奥さんがぐっとやって。うちの場合は共稼ぎで、奥さんいないけど。中から「ぎー、ばたん」で入っていく。それで赤瀬川さんは原稿を書いているわけですけれど、原稿書いてなかったら、上げておいて殆ど出来ていません、というか。取り付く島もないわけです。で奥さんだって、酔っ払って帰ってきて、何か嫌なことがあったら、上げておけば。非常に良いと思うんですけど、嫌だっていうんですよね。「何でだ?」と聞くと「恥ずかしい」って。僕はね、屋根にニラが植わっている方が恥ずかしいと思うんだけど。彼は屋根にニラが植わっている方がまだいい、っていうんですね。で、まだいい方にしたんですけれど。

今、ニラを植えているところです。これみんな赤瀬川さんの知り合いの奥さん連中がこういう形で。こういう形で、ニラが植わっているんですけれど、咲くかどうかわからないんです。こちらが先ほど見せた茶室です。ガードレールを、赤瀬川さんの敷地の中のガードレールです。前の人が作ったんですけど、それを芝生で包んで。ニラは九月に咲く、と種の本にも書いてあった。ところが、七月の末か八

月の頭の日曜日に赤瀬川さんから電話があって、「ちょっと今日来て欲しい」と。ニラが夏の暑さで枯れたかなー、と思って心配して行ったんですね。そうしたら、こうだったんです。うれしかったですよ。これが風で揺れるんですよ。でね、羽虫がいっぱい飛んでいて、羽虫って蝶々とか、トンボは・・・来てないけど、蜜を吸うんです。ぶんぶん音がする。いやあ、うれしかったですね本当に。これが今まで私が一番見てきた中で、植物と建築が上手くいった例。この状態がわずかな期間しかダメなんですよ。花が終わっちゃうし。でも本当にこれはよかったなあ、と。



ニラハウス２

こんなの見ると、わけわからないですよね。畑だか建築とは思わないですよね。これは茶室の上ですけれど、ニラの行列でね。これがなかなかいい。

というようなことをやっておりまして、以上で私の話を終えたいと思います。